



花屋にてとりかぶと数本買ひにけり匂
ふ青花机に置かん

四本の脚が支ふる机のした濃染こぞめの闇の
おのづからなる

冬ふかきわが夜ありけり GODIVA のシ
ヨコラ一顆 Otard 一掬

砂時計にみどりの砂の溜りゆき音なく
かすかに反覆輪廻

次いでまた逆さに立つる砂時計戻る砂
見ゆ、戻らぬ時間ときも



ふるさとコレクション——168

敬老の日発祥の町（兵庫県多可郡多可町）

長い間社会に貢献されてきたお年寄りに敬意を表し、村主催（旧野間谷村）の「敬老会」が催されたのは、昭和22年のことである。

その後、農閑期で気候的にも過ごしやすい9月15日を「としよりの日」と定め、村独自の祝日にすることを提唱した。お年寄を敬う〈心〉が、やがて国をも動かし9月15日は「敬老の日」として、国民の休日に制定された。

町では毎年「おじいちゃんおばあちゃん子ども絵画展」を開催しており、47都道府県から多数の応募がある。作品の展示期間中には、おじいちゃん、おばあちゃんを伴った家族が何組も会場を訪れる。

平成15年に祝日法改正、〈ハッピーマンデー制度〉が導入され、2年後に祝日は9月の第3月曜日へと移動させられてしまった。当初を知る人達はすごく残念がり、敬老の日は9月15日だと言いきる人もいた。

多可町では、現在も9月15日に「敬老の日」として敬老会を開催している。

（資料・写真提供：多可町 解説：中村 京）

口絵鑑賞 戻らぬ時を思いて

「青花」より。一首目は花名に驚かされるが、観賞用として栽培され販売されている種類もあるようだ。葉も美しく華のある立ち姿の紫がかった青。英子氏の好みに相応う花なのだろうが、仄かな寂しさも感じる色合いである。二首目は、花が終わった後の机だろうか。机の空間が広く明るいほど感じる机の下の闇の深さに着目し、拭いようのない闇を立ち上がらせ「おのづからなる」という心の闇にも通じるような下の句が見事。

三首目、艶めくような道具立てのゴディバとコニャックのオタールは英子氏の寂しさの慰めになったのだろうか。「一掬の涙」を連想させる措辞がそうではないことを仄かに匂わす。

四、五首目はそんなやるせない時間の手すさびに砂時計の砂を落して、その繰り返しのなかに輪廻を見出している。たださらさらと落ちてゆく砂の中に引きこまれるように、過ぎ去っていった時間が立ち上がってくるのだろう。「戻る」と「戻らぬ」のリフレインが一人の夜の長さを際立たせている。

(写真・木畑 紀子 鑑賞・大野 英子)